

いい だ じょう じょう あと
飯田城跡

2020年3月

長野県飯田市教育委員会

序

私たちの住む飯田市は、木曽山脈（中央アルプス）と赤石山脈（南アルプス）に挟まれた伊那谷の南部に位置し、古くから交通の要所として栄えてきました。また、海拔400mの天竜川河畔から、海拔2000mの木曽山脈、海拔3000mの赤石山脈までの変化に富んだ地形と豊かな自然に恵まれています。そうした自然を生かし、小京都といわれる飯田城下町を中心に、まちの暮らし、里の暮らし、山の暮らしが営まれ、古代から伝わる伝統文化が息づいています。

近年、継続的に実施されている埋蔵文化財包蔵地の発掘調査によって、当地方の原始・古代史が次第に明らかになってきています。そうした結果、当地方における先人たちの活動は、古く3万年以上も前の旧石器時代にさかのぼることがわかつてきました。それ以降、当地方に暮らした人々の足跡を追ってみると、その生活域は現在の私たちが暮らす箇所と重なってくることが多いことも分かつてきました。そこからは、人間の営みの継続性を知ることができますが、埋蔵文化財を残していくながら、地域の歴史を知るうえで欠かせない文化財として活用することの難しさも強く感じています。

埋蔵文化財は文字どおり地下に埋もれているため、なかなか身边に感じることが少ないと思います。しかし、埋蔵文化財は私たちの祖先の歩んできた足跡を示しており、当地方の歴史を雄弁に語ることができるものです。

このような文化財は、一度壊してしまうと二度とは元に戻らないため、できる限り現状で保存することが最善といえます。しかし、現代に生きる私たちの暮らしに欠かせない開発事業との間では、発掘調査を実施して記録に残して保存することで後世に伝えることもやむを得ないものです。

今回発掘調査を実施した飯田城城跡は、中世領主の坂西氏が整備し、近世は飯田藩主の小笠原氏・脇坂氏・堀氏の居城として、西側に広がる飯田城下町とともに発展してきました。今回の事業は、耐震性防火貯水槽を整備するもので、防災には必要な事業といえ、事前に発掘調査を実施したものです。今回の調査では、当初本丸の一部を対象として発掘調査を実施ましたが、重要遺構が発見されて現状保存を図ることとなり、急速二の丸の一部を対象として発掘調査を実施しました。調査結果は本文で述べられているとおりですが、今後、本書が広く活用されるとともに、当地方の皆様に歴史や文化財がより身近に感じられるよう普及活動を行うことが私どもの使命とも考えます。

最後になりましたが、発掘調査・整理作業の実施に当たり際し多大なるご理解とご協力をいただきました関係各位に、深く感謝を申し上げます。

2020年3月

飯田市教育委員会

教育長 代田昭久

例　　言

1. 本報告書は、飯田市が計画する耐震性防火貯水槽設置工事に先立ち発掘調査された飯田市追手町2丁目655番6号・7号所在の埋蔵文化財包蔵地「飯田城城跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 当初飯田市追手町2丁目655番6号を対象として発掘調査したが、重要遺構が発見されたために現状保存を図ることとし、飯田市追手町2丁目655番7号を対象として発掘調査を実施した。よって、本書には2箇所の発掘調査結果を掲載した。
3. 発掘調査は、飯田市教育委員会が実施した。なお、飯田市追手町2丁目655番6号は本丸に位置するため本丸調査区、飯田市追手町2丁目655番7号は二の丸に位置するため二の丸調査区として記述する。
4. 調査は平成27年度に現地調査を実施し、平成30年度に整理作業を実施し、平成31年・令和元年度で発掘調査報告書を刊行した。
5. 本調査における発掘調査位置は、飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図の区画の以下に位置する。グリッド設定は飯田市新埋蔵文化財基準メッシュに基づき、有限会社M2クリエーションに委託した。
6. 本丸調査区：LC74 25-4　二の丸調査区：LC74 25-43
7. 飯田城城跡の発掘調査及び整理作業には、本丸調査区：IIDJ655-6、二の丸調査区：655-7を用いた。また、遺構には略号として、文化庁文化財記念物課 2010『発掘調査のてびき』に準拠し、掘立柱建物：SB、溝：SD、土坑：SK、柱穴：SP、その他：SXを用いた。
8. 土層観察については、小山正忠・竹原秀夫 2005『新版 標準土色帖』の表示に基づいて記録した。
9. 遺構図の数字は、検出面からの深さ（単位cm）を示している。
10. 遺構写真は木下正史、遺物写真は山下誠一が撮影した。なお、飯田城の絵図関係の写真は飯田市美術博物館から提供を受けた。
11. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館で保管している。

目 次

本文目次

序	
例言	
第Ⅰ章 経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	1
(1) 平成27年度 発掘調査	1
(2) 平成30~令和元年度 整理作業 及び報告書刊行	1
第3節 調査組織	2
(1) 調査	2
(2) 事務局	2
(3) 指導	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 自然環境	3
第2節 歴史環境	4
第3節 飯田城城跡の発掘調査	6
第Ⅲ章 本丸調査区の遺構・遺物	8
第1節 調査区の設定	8
第2節 基本層序	8
第3節 遺構・遺物	9
(1) 掘立柱建物	9
(2) 溝	9
(3) 土坑等	12
(4) 柱穴	12
(5) 遺物	12
第Ⅳ章 二の丸調査区の遺構・遺物	14
第1節 調査区の設定	14
第2節 基本層序	14
第3節 遺構・遺物	15
(1) 溝	15
(2) 土坑	15
(3) 柱穴・礎石	17

第V章まとめ	19
第1節 本丸調査区	21
第2節 二の丸調査区	22
引用・参考文献	24
報告書抄録	37

挿図目次

挿図1 遺跡の位置図	5
挿図2 調査位置及び周辺遺跡図	7
挿図3 本丸調査区調査全体図	8
挿図4 基本層序	8
挿図5 SB031及び出土土器	9
挿図6 SD001・007及び SD007出土土器	10
挿図7 SK008・009・017、 SX012	11
挿図8 SP010・011・013・015・016、 019~030及び遺構外出土遺物	13
挿図9 二の丸調査区遺構全体図	14
挿図10 基本層序	14
挿図11 SD005・008	15
挿図12 SK001・002・006・ 007・011・014及び SK006・007出土遺物	16
挿図13 SP003・004・009・010・012・ 013・015~018、SS019~021	18
挿図14 飯田城の縄張図	19
挿図15 「飯田城絵図」の本丸	20
挿図16 「飯田城外廓開墾之図」の本丸	20
挿図17 「御本丸建屋懸絵図」の建物配置	20
挿図18 「飯田城絵図」の二の丸	23
挿図19 「飯田城外廓開墾之図」の二の丸	23
挿図20 「安富邸図」の二の丸	23

図版目次

図版1	本丸調査区調査前（南東から） 本丸調査区調査前（東から） 本丸調査区調査前（北西から）	25
図版2	SB031全景（南から） SB031全景（西から） SB031全景（北西から）	26
図版3	SD001全景（東から） SD001全景（東から） SZ001全景（西から）	27
図版4	SD001石組（東から） SD001石組（西から） SD001土層	28
図版5	SD007全景（東から） SD007全景（西から） SK008	29
図版6	SK009 SK017 SX012	30
図版7	本丸調査区全景（北から） 本丸調査区全景（東から） 本丸調査区埋め戻し	31
図版8	二の丸調査区調査前（北東から） 二の丸調査区調査前（南西から） SD005・008	32
図版9	SK001 SK002 SK006・007	33
図版10	SK011・014 二の丸調査区全景（北東から） 二の丸調査区全景（北西から）	34
図版11	SK002徳利・猪口・湯飲み SK002土瓶 SK002火鉢	35
図版12	日夏耿之介記念館調査区（全景） 日夏耿之介記念館調査区（部分）	36

第一章 経過

第1節 調査に至る経過

飯田市危機管理室は飯田市追手町2丁目655番6号において、耐震性防火貯水槽設置工事を平成27年度で実施することを計画した。当該地は埋蔵文化財包蔵地「飯田城城跡」の本丸に該当するため、平成27年6月24日付で飯田市から文化財保護法に基づく第94条の通知が提出された。それを承けて長野県教育委員会と飯田市教育委員会による保護協議を行い、平成27年度で発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

第2節 調査の経過

(1) 平成27年度 発掘調査

飯田市追手町2丁目655番6号（以下「本丸調査区」と呼称する）の発掘調査は、平成27年11月24日～平成28年1月15日に実施した。11月24日に重機により調査区を拡張し、翌11月25日より調査員・作業員による発掘調査を開始し、遺構検出・掘り下げ等を実施した。調査を進みると石組の水路が検出され、飯田城内へ水を引き入れた御用水跡であることが判明した。飯田城に係わる重要な遺構であり、現地保存を図る必要が生じた。そこで、事業課である危機管理室と協議を進め、飯田市追手町2丁目655番7号の「飯田城城跡」二の丸に工事予定地を変更し、当該地は現状保存されることとなった。平成28年1月8日までに、掘り下げた遺構の測量・写真撮影を実施し、平成28年1月12日～15日で保護砂を入れて遺構の埋め戻しを行い、最後に駐車場の舗装作業を実施して当該地における発掘調査は終了した。本調査地点は本丸調査区とする。その間、御用水跡が検出されたことで、平成27年12月19日に現地見学会を開催し、参加者は30人であった。

飯田市追手町2丁目655番7号（以下「二の丸調査区」と呼称する）の発掘調査は、平成28年1月7日～15日に実施した。1月7日に重機により調査区の拡張を開始し、翌8日から調査員・作業員による発掘調査を開始した。遺構検出・掘り下げ等を順次実施し、掘り下げた遺構の測量・写真撮影を済ませ、1月15日には現地での発掘調査が終了した。その後、飯田市考古資料館において、図面写真類の基礎的な整理を行い、平成28年3月28日に業務が完了した。

(2) 平成30年～令和元年度 整理作業及び報告書刊行

整理作業と発掘調査報告書刊行については平成30年度で実施することとし、飯田市考古資料館で作業を実施した。出土遺物は洗浄・注記・復元を順次実施し、遺物実測作業を行った。遺物実測図等はトレースを行い、遺物図版とした。遺構実測図については遺構別図版などを作成するために第2原図を作成し、トレースを実施して遺構図版とした。遺物の写真撮影遺構・遺物について写真図版を作成した。発掘調査報告書は、令和元年度で印刷して刊行した。

第3節 調査組織

(1) 調査

調査主体者	飯田市教育委員会	教育長職務代理 小林 正佳 (平成27年度)	教 育 長 代田 昭久 (平成30年度～)
調査担当者	木下 正史 (平成27年度：現地調査担当)	山下 誠一 (報告書作成担当)	
調査員	吉川 豊 (平成27年度)	下平 博行	
	坂井 勇雄	瀧谷恵美子	
	羽生 俊郎	春日 宇光 (平成30年度～)	
	佐々木佑里香 (平成28年度～)	福井 優希 (平成29年度～)	
作業員	伊東 裕子	伊藤 和恵	唐沢古千代 小平不二子 斯波 幸枝
	中平けい子	中村地香子	福澤 育子 松下 省三 宮内真理子
	吉川 悅子		

(2) 事務局

飯田市教育委員会			
教 育 次 長	三浦 伸一 (~平成30年度)	今村 和夫 (平成元年度)	
文化財担当課長	松下 徹 (平成27年度)	馬場 保之 (平成28年度～)	
文化財保護係長	馬場 保之 (平成27年度)	下平 博行 (平成28年度～)	
文化財保護係	吉川 豊 (平成27年度)	羽生 俊郎	
	木下 正史 (平成27年度)	村山 博則 (平成30年度～)	
	宮澤 圭 (~平成29年度)	春日 宇光 (平成30年度～)	
	佐々木佑里香 (平成28年度～)	福井 優希 (平成29年度～)	
	村沢ひとみ (平成27年度)	山下 誠一	

(3) 指導

長野県教育委員会 文化財・生涯学習課

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

飯田市は、長野県南部を並走する木曾山脈（中央アルプス）と、赤石山脈（南アルプス）の前山である伊那山地にはさまれた伊那谷の南端、飯田盆地に位置する。また、平成17年10月1日に上村・南信濃村の2村と合併し、赤石山脈と伊那山地にはさまれた遠山谷も含まれることとなった。

伊那谷は南北に約100kmと長く、中央には諏訪湖を源とする天竜川が南流し、その両岸には国内でも有数な段丘地形が形成されている。北は諏訪地方や松本平の玄関口の塩尻市、南は天竜川と秋葉街道を介して遠州地方に、西は神坂峠や矢作川伝いに美濃地方・三河地方に通じている。こうしたことから、後二者に係る飯田・下伊那地方は長野県の南の玄関口といえる特徴を備えている。

伊那谷の基盤地質は領家帯に属する花崗岩・片麻岩である。一方、伊那谷の東、伊那山地と赤石山脈の間に遠山谷には中央構造線が走っており、赤石山脈は三波帶・戸台構造帶・秩父帶・四十萬帶で構成される。この秩父帶・四十萬帶から産する硬砂岩・緑色岩・チャートなどの堆積岩は、三峰川・小渡川を通して天竜川まで流れ出て、その河床に広く分布している。こうした石材は、旧石器時代以来石器の材料として長く利用されている。

伊那谷の形成は、約250年前に天竜川が流れ出たころから始まる。伊那谷独自の段丘地形は、赤石・木曾の両山脈が隆起するに伴い、沖積地との間に形成された逆断層によるものである。この段丘は『下伊那の地質解説』（下伊那地質誌編纂委員会 1976）によると、高位面・高位段丘・古期扇状地・中位段丘・中期扇状地・低位段丘I・新期扇状地・低位段丘IIの5つに大きく編年されている。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12.8℃となり、1月の平均気温は0.8℃、8月の平均気温が25.1℃と寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示している。一方、降水量の面からみれば年間約1600mm、梅雨と台風の季節である6・7・9月には200mmを上回り、太平洋岸式気候に属するともいえる。こうした地理的・気候的条件により、飯田・下伊那地方には暖地性から亜高山帯まで多種多様な動植物がみられる。植物の水平分布からみると暖地性と温帶性の接点にあたり、特に照葉樹林が存在することは県下の他地域と大きく異なる。

飯田城城跡の所在する飯田市街地は標高が484~495mで、南西側を飯田松川に、北東側を野底川により開析されたため、あたかも丘陵上に立地するかにみえる。このため、俗に「丘の上」と呼称されているが、地質学的には低位段丘Iの伊久間面に対比されている。飯田市街地が発達する部分の段丘面は、一見して平坦に見えるものの、市街地ほぼ中央部で北西山麓から南東方向に流入する谷川によって分割され、さらに飯田松川に面した南側は王竜寺川・源長川によって入り江状に開析されている。したがって、段丘上にはこれら河川の開析により幾筋もの畝状の微高地が形成されていたと推定される。段丘の端部は深い浸食谷に囲まれ、半島状に突き出ている。段丘先端から飯田松川の氾濫原までの比高差はおよそ60mあり、急峻な崖が形成されている。飯田城城跡はこの急峻な崖に囲まれた段丘の先端部を利用して構築されており、飯田城城跡から北西に続く城下町は、谷川と王竜寺川に囲まれた細長い地上と谷川を挟んだ北西側のやや広い台地とにも広がっている。

第2節 歴史環境

飯田市街地は、近世の飯田藩の城下町として整備が進み、第二次世界大戦後の昭和22年（1947）に飯田大火によって街並みが灰燼に帰し、その後の復興で格盤の目に区画された現在の街並みが形成された。このため、旧来の地形を示す箇所は少なく、遺跡の分布等不明の点が多い。しかし、近年の市街地の再開発事業等によって発掘調査が実施されており、新たな知見が得られつつある。周辺地区を含めたこれまでの考古学的事実と文献史学から、旧市街地の歴史環境を概観する。

旧石器時代では、今次調査区の西に隣接する飯田市美術博物館先立つ発掘調査で細石刃核が出土しているのみで、それ以外の状況は不明である。

縄文時代になると、各所で遺跡が確認されるようになる。市街地西側の風越山麓に点在する正永寺原・押洞・大休下などの各遺跡から、早期の押型文土器が出土している（飯田市教委 2015b）。中期になると、正永寺原遺跡・權現堂前遺跡・押洞遺跡・宮の前遺跡（旧大門町遺跡）・箕瀬遺跡や市街地の鈴加町からも該期の集落が調査され、山麓から段丘上の広範囲に遺跡が広がる（飯田市教委 2004a・2004b・2010、飯田高校考古学研究会 1975）。後期・晚期については遺跡数が激減し、正永寺原遺跡・權現堂前遺跡等から呪術的な遺物等が出土している（飯田市教委 2004b）。

弥生時代になると、權現堂前遺跡から在地の縄文系土器と外来的東海系土器が混在して出土しており、稻作農耕波及期の様相を知ることができる（飯田市教委 2004b）。ただし、前期から中期の遺跡についてはほとんど確認されておらず、この時期については水田による稻作に適した天竜川に近い下位段丘上に遺跡が立地する（飯田市教委 2012）。後期になると上位段丘上に遺跡が広がる。權現堂前遺跡・方角東遺跡・羽場署遺跡・箕瀬遺跡・飯田城下町遺跡等から堅穴建物や方形周溝墓が調査され、集落域の様相を知ることができる（飯田市教委 2003・2006・2008・2010・2016）。微地形をみると、広範囲の水田可耕地が確保できるわけないので、畑作を主体にして稻作を組み合わせた複合的な農業が行われていたと考えられる。

古墳時代になると中期中葉から後期にかけて、下位段丘面の座光寺・上郷・松尾・竜丘・川路地区に前方後円墳を始めとする古墳が築造される。それに伴い、馬具や馬匹埋葬土坑が多く、集落数も激増する。列島や東アジアを含めた情勢の中で、馬匹生産にかかわって大和政権との深いつながりを持った結果と考えられる。旧市地区では幾つかの古墳が築造されているが、墳丘等は削平されており、その詳細は不明である。また、前期から中期の堅穴建物が丸山遺跡・飯田城下町遺跡から検出されており、小規模な集落が営まれていたことがわかる（飯田市教委 1988・2016）。

奈良時代から平安時代では、座光寺に所在する恒川遺跡群が伊那郡衙跡であることが長年の調査で確定され、正倉院などについては恒川官衙遺跡として国史跡に指定されている。市街地周辺では、箕瀬遺跡から9世紀末から10世紀の堅穴建物が調査されており（飯田市教委 2010）、中世の文献にみえる郡戸荘に係るものと考えられる。

中世では、鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』に郡戸荘飯田郷がみえ、鎌倉時代から室町時代の飯田郷の地頭は阿曾沼氏で、室町時代中期には坂西氏に変わったと考えられている。坂西氏は、室町時代守護職の権威が衰退して在地領主の莊園支配や国領の横領が進む中で、飯田城築城や白山社奥社本殿



挿図1 遺跡の位置図 (1 : 100,000)

を造営するなどからみて、相当の勢力を有するようになったと推定される。

戦国時代から江戸時代初期にかけての飯田は、武田・織田・徳川・豊臣・脇坂による支配が変遷し、江戸時代前期の寛文12年（1672）、堀親昌が飯田藩主となり、以来12代約200年に亘り堀氏が飯田藩を統治した（飯田市美術博物館 2005）。

第3節 飯田城城跡の発掘調査

飯田城城跡のこれまでの発掘調査について簡単に触れる。なお、飯田城の縄張りについては、第V章で述べる。

昭和61・62年度で、飯田市美術博物館建設に先立ち飯田城城跡の二の丸を飯田市教育委員会が発掘調査した。飯田藩家老安富家の屋敷があった箇所で、江戸時代の大通り跡・屋敷の礎石・御用水跡・井戸跡・池跡・鍛冶の跡等が発見された。中世の竪穴建物・空堀も調査され、近世以前の歴史の一端を知ることができた。本丸跡についても一部が発掘調査され、池の跡や柱穴が発見された。

平成12年度で、飯田市立追手町小学校昇降口改築に先立ち出丸の一部を飯田市教育委員会が発掘調査した。櫛堀の一部や石組の水路が調査された（飯田市教委 2002）。平成17年度には、堀端地区まちなか再生組合による共同建替え事業に先立ち三の丸を飯田市教育委員会が発掘調査した。絵図等により追手御門があった箇所付近であり、追手口土橋や北堀の一部等が調査された。また、中世にさかのぼる土坑・柱穴も確認されている（飯田市教委 2007）。平成25年度に、長野県飯田合同庁舎耐震工事に先立ち桜丸の一部を飯田市教育委員会が発掘調査した。小規模な調査にとどまったので、江戸時代の掘立柱建物の可能性のある柱穴や明治時代以降の石組水路等が調査された（飯田市教委 2015a）。

このように、二の丸を除けば小規模な発掘調査ではあるが、飯田城城跡の一部の様相が明らかとなっている。



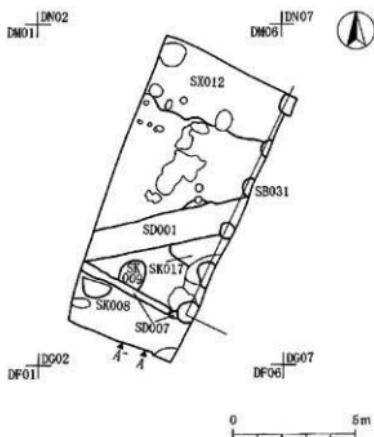
1 本丸調査区 2 二の丸調査区
挿図2 調査位置及び周辺遺跡図 (1 : 5,000)

第Ⅲ章 本丸調査区の遺構・遺物

第1節 調査区の設定

飯田市追手町2丁目655番6号で、発掘調査位置は、世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財メッシュ図（飯田市教委 2009）による区画LC74 25-34に位置する。調査位置は、飯田市美術博物館第3駐車場の西寄りに位置し、本丸御門が想定される箇所の東近接地となる。

調査面積は65.2m²である。



挿図3 本丸調査区調査全体図（1：200）

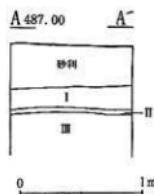
第2節 基本層序

調査区の基本層序については、調査区南西壁のA-A'の箇所を選定して挿図4で示した。表土下は駐車場整備のための砂利が入れられており、若干の造成を受けている。I・II層は水平堆積し、その他の壁面でも同様であった。明治時代以降に造成されたと判断される。遺構確認面は地山の上面で、遺構検出は比較的容易にできた。砂利層から下の土層は以下による。

I層：10YR 3/4 暗褐色 シルト質壤土に10YR 5/6 黄褐色 植壤土がブロック状に混じる。しまりあり

II層：10YR 3/4 暗褐色 シルト質壤土 しまりあり

III層：10YR 5/6 黄褐色 植壤土 地山



挿図4 基本層序（1：40）

第3節 遺構・遺物

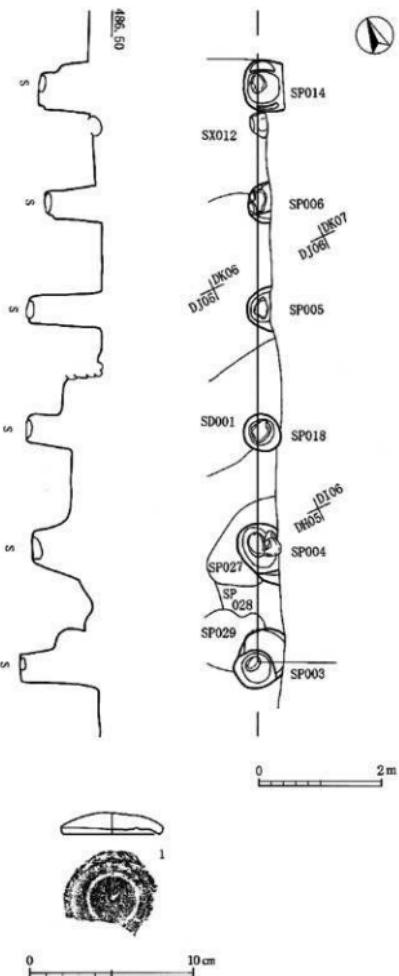
(1) 堀立柱建物

① SB031 (挿図5)

調査区東端部のDH05からDL07にかけて、南から直線的に並ぶ柱穴 (SP003・004・018・005・006・014) を検出して堀立柱建物 (SB031) とした。東側調査区外に遺構の大半がかかるため、西側の柱穴を5間分で9.5mの長さを検出したのみである。SD001・SP027・SP029・SX012に切られる。SP003の南側には柱穴がないためにSP003は西隅の柱穴であるが、SP014より北に延びるかは、調査区外のために不明である。建物規模は不明で、柱間は1.9mを測り、柱穴の方向はN27°Eを示す。柱穴はSP003で直径100cm・深さ132cm、SP004で直径104cm・深さ118cm、SP018で直径64cm・深さ76cm、SP005で直径72cm・深さ117cm、SP006で直径68cm・深さ99cm、SP014で直径84cm・深さ102cmを測る。柱穴の底面には礫盤石が入れられており、SP003で28×22cm、SP004で38×25cmと34×29cmの2個、SP018で42×31cm、SP005で32×24cm、SP006で39×18cm、SP014で33×22cmを測る。

出土遺物はSP003から焼塙壺蓋 (5・1)・平瓦片、SP004から平瓦片・陶器片が出土した。

江戸時代に整備された御用水跡 (SD001) に切られるので、それ以前に位置づく。



挿図5 SB031 (1:80) 及び出土器 (1:3)

(2) 溝

① SD001 (挿図6)

D102からD106にかけて調査区を斜めに横切る形で調査し、両側に延びる。長さ6.5mを調査し、長軸方向はN79°Eを示す。石組の水路で、幅40~50cm・深さ60~65cmを測る。土層は4層で、自然に埋まったものと考えられる。底面は地山の黄褐色植壟土できわめて硬く、叩き締められたことも考えられる。底面の深さは東側がやや低くなっている、東へ水が流れたものといえる。石組は丁寧に4段積まれ、底部の根石が大きく上部の石がわずかに小さくなる。石の積み方は玉石の乱層積みで、やや角ばっ

た花崗岩が多いので、飯田松川の川原石を使ったと想定される。溝の掘り方の幅は1.2~1.4mを測る。

出土遺物は近世から明治時代の陶磁器片や平瓦片が出土し、瀬戸・美濃系の灰釉行平（6-1）を図化できた。

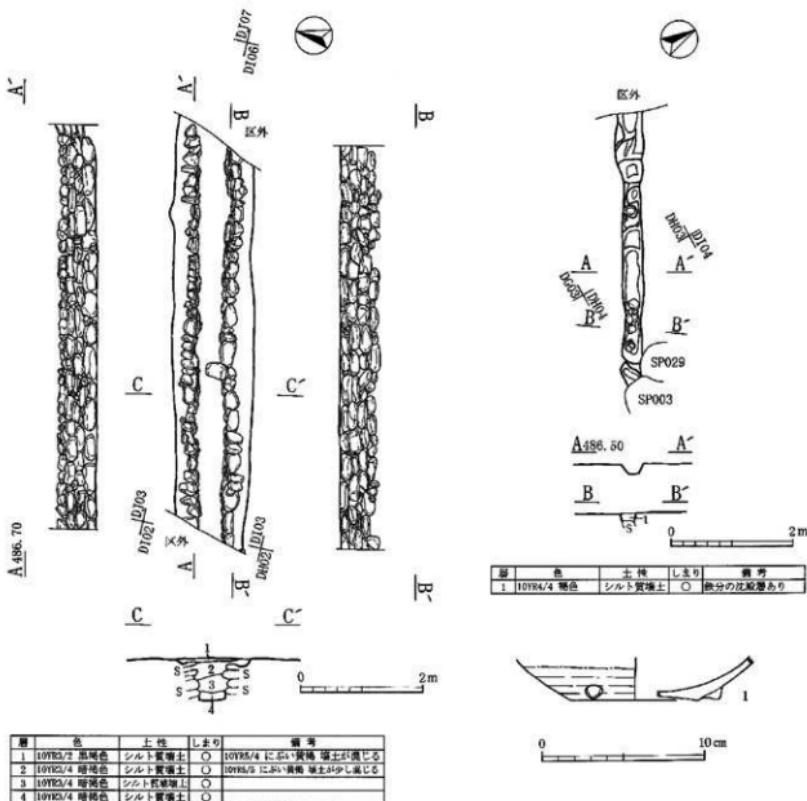
調査位置や石組水路の状況から、本遺構は飯田松川を水源として、飯田城下町から飯田城内へ通じる水路である御用水跡である。

② SD007 (挿図6)

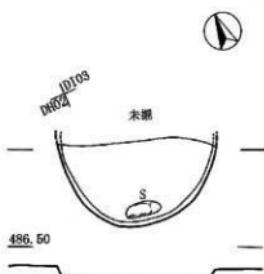
D102からDH04にかけて検出し、西側調査区外に延びる。SK008を切り、SK009に切られる。長さ4.2mを調査し、長軸方向はN72°Wを示す。幅は24~46cm・深さ7~20cmを測り、断面は逆台形をなす。底面は水流でえぐられたような凹凸や石がある。

出土遺物は江戸時代幕末から明治時代の陶磁器片や平瓦片が出土したが、図化できるものはない。

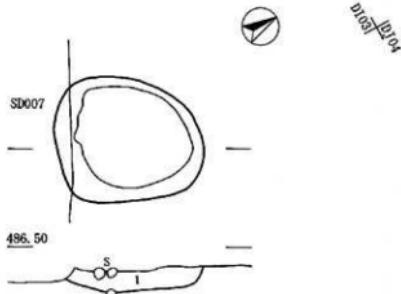
遺構の状況から、一時的に水が流れた跡と考えられる。



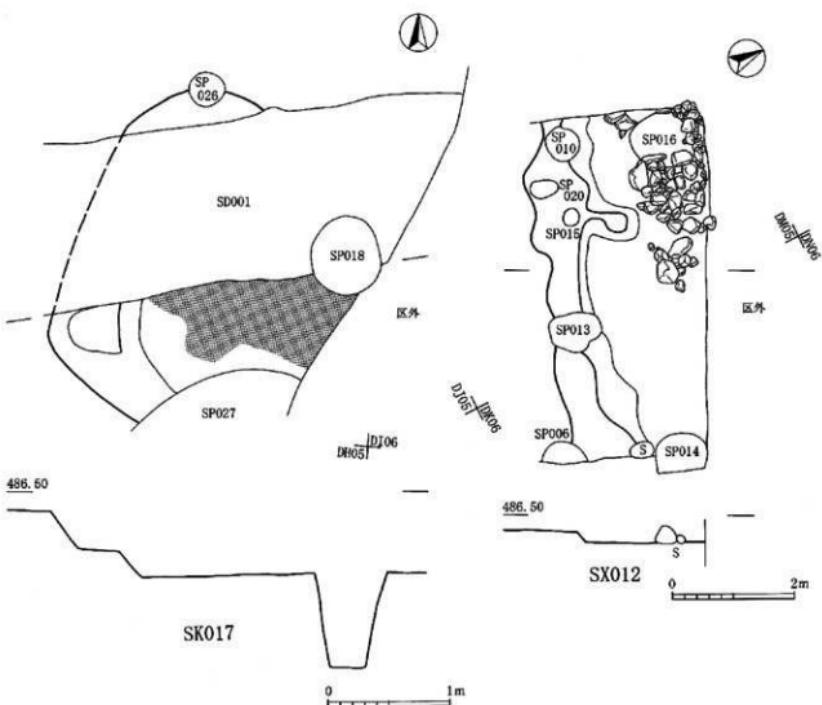
挿図6 SD001・007 (1:80) 及びSD007出土土器 (1:3)



SK008



SK009



挿図 7 SK008・009・017 (1 : 40), SX012 (1 : 80)

(3) 土坑等

① SK008 (挿図7)

DH03を中心にして検出し、北側はSD007に切られ、1／2程度を調査した。直径1.3mの円形を呈し、深さは6cmを測る。断面形は浅い逆台形をなし、底面は平坦となる。

出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

② SK009 (挿図7)

DH03を中心にして検出し、全体を調査した。SD007を切る。1.0×1.2mの楕円形を呈し、深さは19cmを測る。断面形は皿状となり、底面はほぼ平坦である。

出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

③ SK017 (挿図7)

DI05を中心にして検出し、SD001・SP018・SP027に切られる。南東側は調査区外となって、全体の1／3程度を調査した。南西・北東方向が2.7mを測り、全体形は不明である。断面形は逆台形をなすと考えられ、西隅は壁に段を持つ。底面は平坦で、網点で示した箇所は鉄分・マンガンが沈殿して硬くなっていた。SD001からわずかに漏れた水の影響で、底面に鉄分・マンガンが沈殿したものと考えられる。

遺物は陶器片が出土した。

④ SX012 (挿図7)

調査区北東端部のDM04からDL06にかけて検出し、北東側は調査区外となって全体形は不明である。SP006・010・013～016を切る。長さ5.5m・幅2.3～2.9mを調査したが、全体の規模は不明である。南壁面は不規則で、底部付近が急でそれからきわめて緩やかな立ち上がりをなす。底面はほぼ平坦で、北隅の1.2×3.0mの範囲に10～44cmの集石が検出された。規則的な並び方ではなく、無造作に入れられたかのようである。

出土遺物は素焼きの粘土片と平瓦片が出土した。

(4) 柱穴

① SP010・011・013・015・016、019～030 (挿図8)

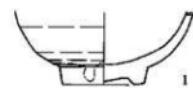
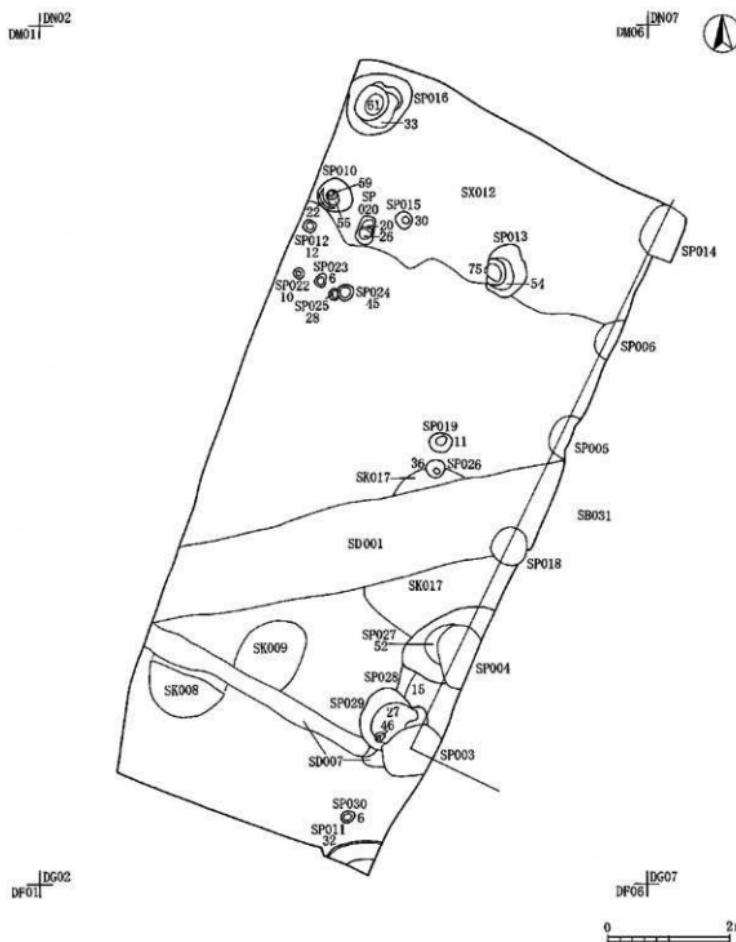
柱穴等はSP010・011・013・015・016、019～030の17個を検出した。集中するのは調査区北部付近で、10個の柱穴が確認された。掘立柱建物の柱穴の可能性も考えられるが、調査区が限定されて建物としての把握はできなかった。大半は柱穴状の穴であるが、SP011・027・028・029の4個はやや大きな土坑状の穴となる。

出土遺物はSP011から江戸時代の志野片と瓦片が出土した。

(5) 遺物

出土量は少ない。すべて破片であり、完形に復元できる個体はない。江戸時代幕末から明治時代にかけての陶磁器や瓦片が主体となる。

遺構外のDG04から瀬戸・美濃焼の鉄釉丸碗(8-1)が図化できた。

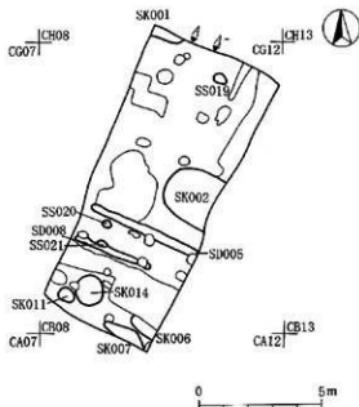


挿図8 SP010・011・013・015・016、019～030 (1:80) 及び遺構外出土土器 (1:3)

第IV章 二の丸調査区の遺構・遺物

第1節 調査区の設定

飯田市追手町2丁目655番7号で、世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財メッシュ図(飯田市教委 2002)による区画LC74 25~43に位置する。飯田市美術博物館第2駐車場の東端部で、二の丸を通る御本城道の東近接地に位置する。調査面積は62.5m²である。



挿図9 二の丸調査区調査全体図 (1:200)

第2節 基本層序

基本層序については、北東側用地外壁のA-A'で示した箇所を選定して挿図で示した。駐車場舗装の造成土から下の土層は以下による。

I層: 10YR 3/4 暗褐色 シルト質壤土 しまりあり

II層: 10YR 4/4 暗褐色 シルト質壤土に10YR 5/6 黄褐 SiL がブロック状に混じる。しまりあり

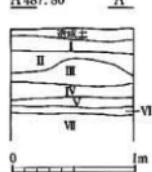
III層: 10YR 4/4 暗褐色 シルト質壤土に細かな炭が混じる。しまりあり A487.80 A'

IV層: 10YR 4/4 暗褐色 シルト質壤土 しまりあり

V層: 10YR 5/4 にぶい黄褐色 シルト質壤土に焼土が混じる。しまりあり

VI層: 10YR 5/4 にぶい黄褐色 シルト質植壤土 しまりあり

VII層: 10YR 5/6 黄褐色 植壤土 地山



挿図10 基本層序 (1:40)

第3節 遺構・遺物

(1) 溝

① SD005 (挿図11)

CD09からCC10にかけて検出し、南東側調査区外に延びる。

長さ4.7mを調査し、長軸方向はN64°Wを示す。幅は20~32cm・深さ4~8cmを測り、断面は逆台形をなす。

出土遺物は近世陶磁器片1点が出土した。

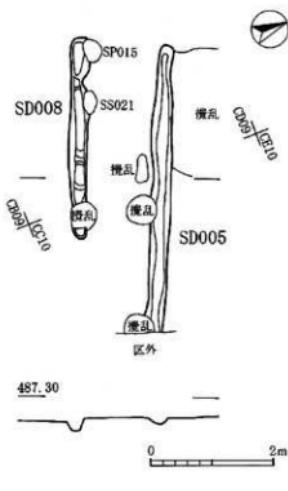
② SD008 (挿図11)

CD08からCC09にかけて検出し、両側で途切れる。

長さ3.2mを調査し、長軸方向はN68°Wを示す。幅は24~28cm・深さ6~14cmを測り、断面は逆台形をなす。

出土遺物はない。

SD007・SD008は1.0mの間隔でほぼ並行しており、関連する遺構の可能性がある。堀の雨落ち溝とも考えられるが、調査範囲が限定されて断定はできない。



挿図11 SD005・008 (1:80)

(2) 土坑

① SK001 (挿図12)

調査区北隅のCH10を中心にして検出し、大半が北側の調査区外にかかるため、平面形は不明である。46×122cmの範囲を調査し、深さは18cmを測る。底面は平坦で、壁面は急に立ち上がる。

出土遺物は江戸時代の瀬戸・美濃陶器の灰釉丸碗片(12-1)が1点出土した。

② SK002 (挿図12)

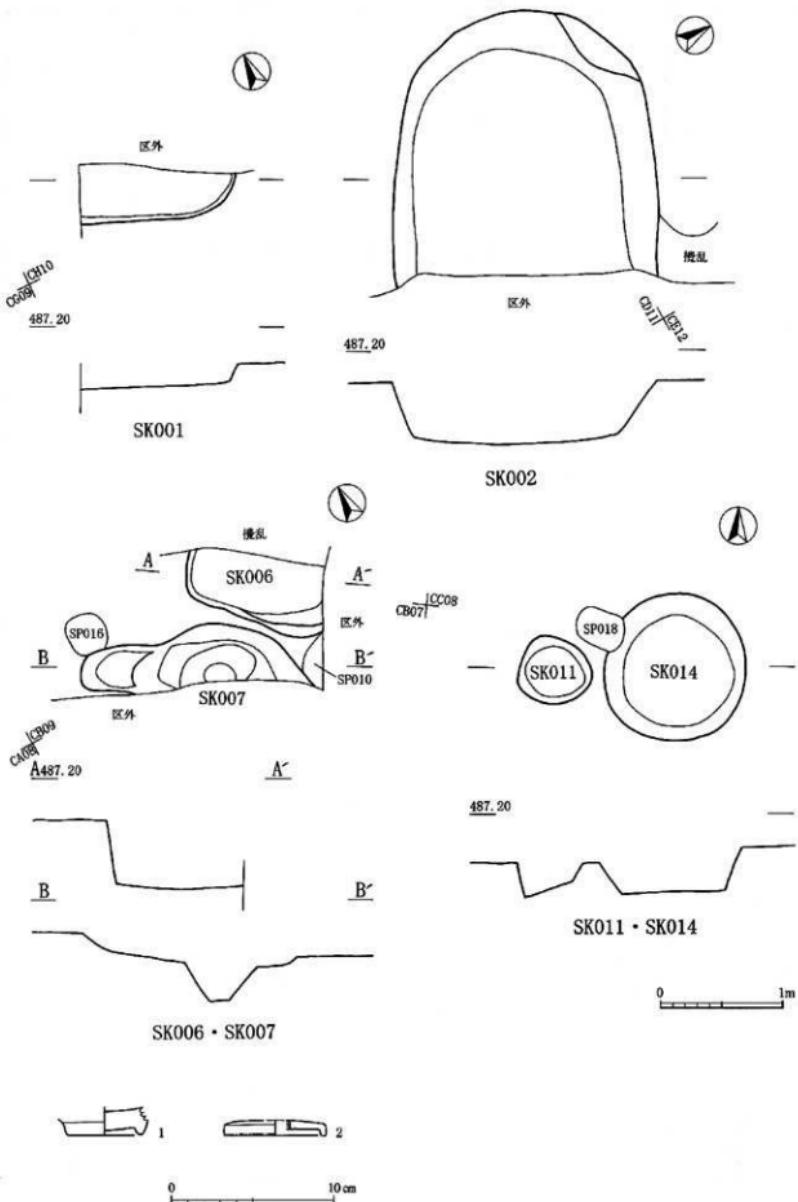
CD11を中心にして検出し、南東側調査区外にかかる。隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈すると想定される。北東・南西方向が2.2mを測り、南東・北西方向は2.15mを調査した。壁高は38~48cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。底面は中央部がわずかに窪んでいた。

出土遺物は図版11で示した磁器の染付筒形湯飲み2点・染付端反碗1点・染付猪口3点・染付角鉢蓋1点・染付徳利1点・白磁徳利1点、瀬戸・美濃系陶器の鉄釉土瓶1点・灰釉蓋物蓋(12-2)、素焼き火鉢1点、巴文の軒先丸瓦1点等がある。染付徳利の底部外面には右の写真1で示した「二ノ丸松澤亭」の墨書が確認できる。

出土遺物は明治時代以降のものがほとんどを占め、飯田城廃城後のゴミ穴と考えられる。



写真1 染付徳利底部墨書



挿図12 SK001・002・006・007・011・014及びSK001・007出土土器 (1:40, 1:3)

③ SK006（挿図12）

CB10を中心にして検出し、北東側は擾乱に切られて南東側は調査区外なり、全体形は不明である。52×104cmの範囲を調査し、深さは54cmを測る。壁面はほぼ垂直となり、南壁の一部は途中で稜を持つ。底面は中央部でわずかに窪んでいた。

出土遺物は瀬戸・美濃系の灰釉丸碗の高台との磁器の染付丸楕片が出土した。

④ SK007（挿図12）

CA08を中心にして検出し、南西側が調査区外となり、全体の1／2程度を調査した。44×192cmの範囲を調査し、深さは45cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、底面の一部が穴状に深くなる。

出土遺物は素焼き陶器片がある。

⑤ SK011（挿図12）

CB08で検出し、全体を調査した。52×58cmの楕円形を呈し、深さは25cmを測る。底面は西側が深くなり、断面形は歪んだ逆台形を呈する。

出土遺物はない。

⑥ SK014（挿図12）

CB08・09を中心にして検出し、全体を調査した。直径116cmの円形を呈し、深さは33cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物はない。

（3）柱穴・礎石

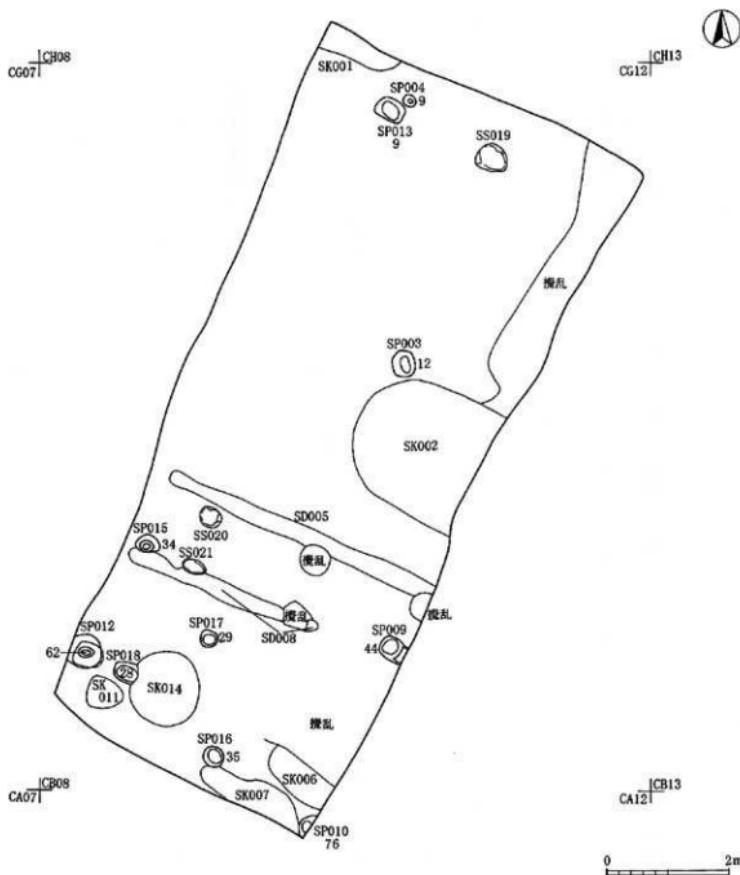
① 柱穴（挿図13）

柱穴はSP003・004・009・010・012・013・015～018の10個を検出した。集中するのは調査区南西部付近で、7個の柱穴が確認された。掘立柱建物の柱穴の可能性も考えられるが、調査区が限定されて建物としての把握できなかった。

出土遺物はない

② 紋石（挿図13）

調査区内でSS019～021の平盤の石3個を検出した。検出面直上にあり、礎石建物の石とも考えられる。しかし、石が原位置に残っているかも不明であり、建物としても把握できない。

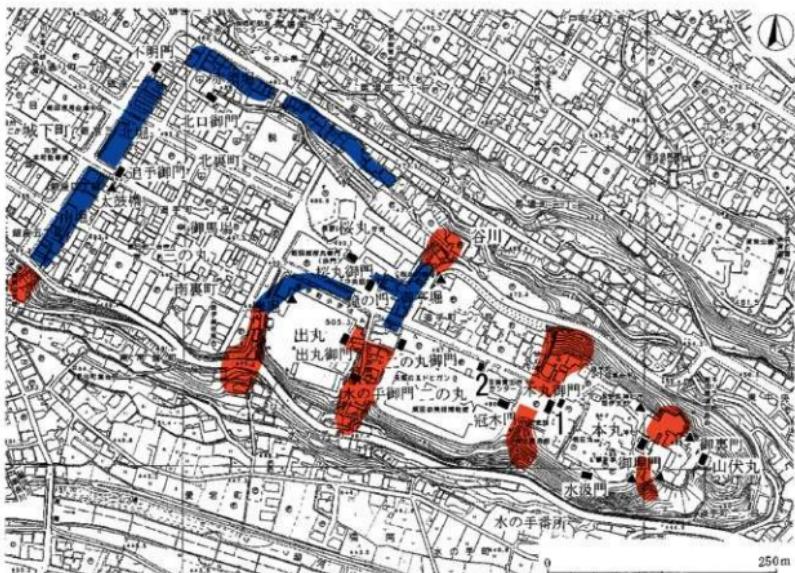


挿図13 SP003・004・009・010・012・013・015～018、SS019～021 (1 : 80)

第V章 まとめ

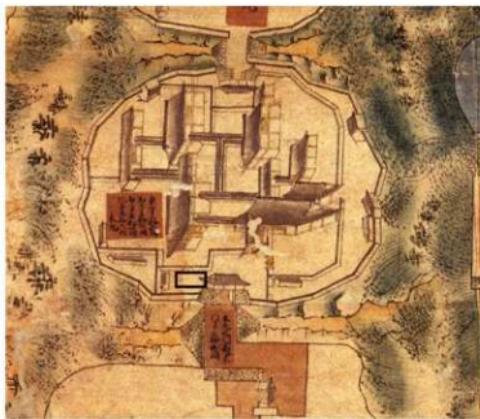
今次調査は飯田城城跡の本丸と二の丸の2箇所であった。いずれも調査範囲は限定されたが、飯田城に係わる新しい見知が得られた。ここでは、調査によって得られた成果・課題を調査地点ごとに指摘してまとめとする。

飯田城は南側の飯田松川、北側の谷川に浸食された谷に挟まれて半島状に残った段丘の突端に築かれた平山城である。挿図14で示したように、東の突端から山伏丸・本丸・二の丸・出丸・桜丸・三の丸が直線的に並ぶ「連郭式」と呼ばれる縄張りとなる。それぞれの曲輪は空堀・水堀で区画され、出入り口には城門や枡形が設けられた。現在の銀座通り南東側に水堀の北堀・南堀が設けられ、その西側に飯田城下町が広がる（飯田市美術博物館 2005）。今次調査地点は、本丸調査区は本丸御門の東隣接地、二の丸調査区は二の丸中央部の東寄りに位置する。



1. 本丸調査図 2. 二の丸調査区 ■門 ▲櫓 ■水堀 ■空堀

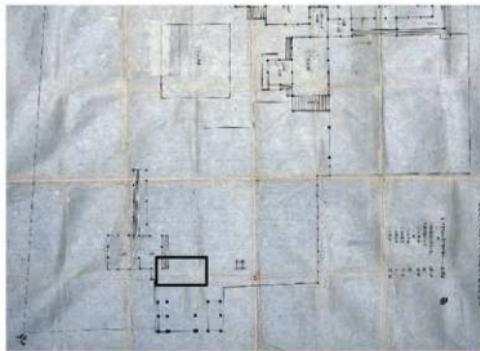
挿図14 飯田城の縄張図 (1 : 5,000)



挿図15 「飯田城絵図」の本丸



挿図16 「飯田城外廊開墾之図」の本丸



挿図17 「御本丸建屋惣絵図」の建物配置

第1節 本丸調査区

本丸調査区では、主な遺構として石組水路の御用水跡（SD001）と掘立柱建物（SB031）が調査された。それ以外は土坑・溝等が確認されたが、時期・役割が特定できたものは少なく、本調査区を特微づけるものではない。また、本丸御門の遺構はまったく確認できなかった。

飯田城は幾つかの絵図が残されており、調査地点の様相を知ることができる。その中で、17世紀後半の脇坂氏時代につくられて堀氏に引き継がれた「飯田城絵図」（挿図15）、明治5年（1872）に飯田城廃城に際して作成された「飯田城外廓開墾之図」（挿図16）、同じく明治5年に飯田城の城郭を明治政府に引き渡す際に作成された本丸の建物の間取りを示した「御本丸建屋惣絵図」（挿図17）を参考にして、本丸調査区の調査成果を比較検討する。「飯田城絵図」では、本丸御門から東側に少し離れて堀、北側に東西方向に長い番所の建物が描かれている。調査地点は番所南側の建物等がない四角で示した箇所と考えられる（挿図15）。「飯田城内開墾之図」では、本丸が白塀で囲まれ、中心部に本城（本丸御殿）が位置する。本丸御門から本城裏となる北側に斜めに横切る御用水が描かれる。調査地点は御用水が斜めに横切る四角で示した箇所と考えられる（挿図16）。「御本丸建屋惣絵図」では、中心部に本丸御殿の間取りが示され、本丸御門の北東隣接地に、脇坂時代とは逆の南北方向に長い番所の間取りが示される。調査地点は番所に一部がかかる四角で示した箇所と考えられる（挿図17）。

SD001は「飯田城内開墾之図」に描かれる御用水と一致し、調査区北西側には本丸御門跡があるものと把握される。「御本丸建屋惣絵図」の番所に調査区北側部分がかかると考えられるが、その遺構は確認できなかった。

掘立柱建物のSB031はSD001（御用水跡）に切られていることから、それ以前に位置づく。御用水が整備されたのが堀氏の時代とすると、江戸時代前期の17世紀後半以前となる。「飯田城絵図」で描かれた堀の柱穴の可能性も検討したが、調査位置が西側に寄っているので堀ではないと判断される。そうすると、脇坂氏以前の遺構であると考えられる。掘立柱建物の西側柱穴を検出したのみで、形態・規模等が不明であり、明確な時期や役割を特定することはできない。

出土遺物は、わずかに近世のものがみられたが、大半は明治時代以降である。完形に復元できたものではなく、小破片が主体となって出土量も少ない。堀氏時代の当該地は、近接地に本丸御門、一部が番所にかかったにせよ、御用水が斜めに横切る場所となる。本丸御殿への通路でもあり、生活空間的な要素が少ないとみられる。

南側に20m程離れた日夏耿之介記念館の敷地は発掘調査が実施されており、参考までに図版12で全体と部分の写真を示した。詳細は未報告であるが、遺構が比較的密集し、溝・土坑・柱穴・石列等が調査されている。本丸調査区の遺構と直接結びつくものはないと判断され、近接地ではあるが様相が異なっていることが分かる。これも、本調査地点の通路としての役割を示していると考えられる。

第2節 二の丸調査区

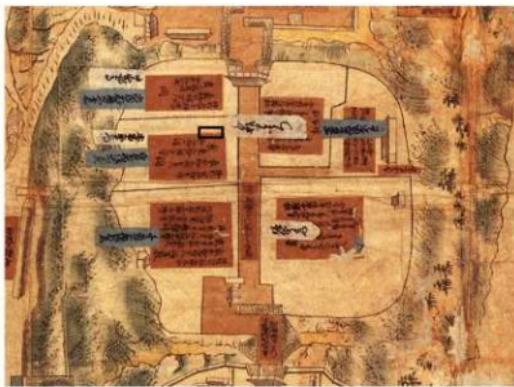
二の丸調査区では、土坑・溝・柱穴・礎石が調査された。明確な時期や役割が特定できたものは、近代のゴミ穴であるSK002のみある。また、D007・SD008が堀の雨落ち溝である可能性あるが、その他は時期・役割が明確には特定できなかった。

飯田城の絵図をみると、「飯田城絵図」(挿図18)では中央部に二の丸御門と本丸御門を結ぶ道（本城道）があり、その両側は屋敷の敷地となっていた。また、「飯田城外開墾之図」(挿図19)では、中央部に二の丸御門と本丸御門を結ぶ道（本城道）と御用水があり、その両側は屋敷となる。飯田市美術博物館建設に先立つ調査では、本城道跡や御用水跡が調査されており、本調査区はそれより北側に位置する。そうするといずれの絵図でも、調査地点は本城道北側隣接地の屋敷地の一部の四角で示した箇所と考えられる。明治3年(1870)の「安富邸図」(挿図20)によると、本城道の南側は堀家の家老を勤めた安富家の屋敷の敷地となり、北側はお花畠となる。調査地点は絵図外となるお花畠の一部の箇所と考えられる。

二の丸調査区では堀や礎石建物の礎石らしき石が残されていたとはい、飯田城に係わる明確な遺構は確認できなかった。近世にさかのぼる出土遺物も極めて少数であった。明治時代以降は、郡立飯田中学校・飯田中学・飯田商業高校・飯田長姫高校と変遷しながら、学校敷地の一部であった。それに係わる遺構も確認できなかった。いずれにせよ、調査範囲が限定されたので、遺構が少ない箇所を調査したものといえる。

飯田城城跡の本丸・二の丸の一部を調査し、本丸調査区については御用水跡が検出されたため現状保存を図ることとなった。

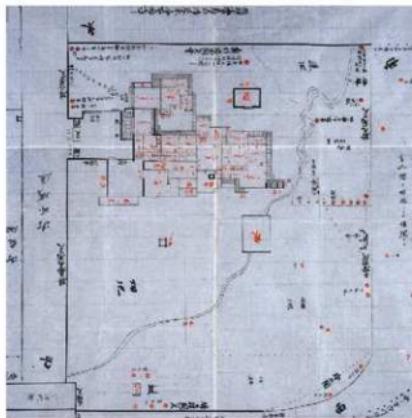
これまでにも、本丸部分では柳田國男館・日夏耿之介記念館建設に先立つ発掘調査で検出された遺構は埋め土保存しており、将来にわたって近世の遺構は保存する方針で臨んできている。飯田市は、近世飯田城とその城下町が基礎となっている。現在の飯田城城跡は各種大型公共施設等があり、壊された個所も多い。しかし、残されている箇所もあり、今後も埋蔵文化財保護に万全を期す必要がある。



挿図18 「飯田城絵図」の二の丸



挿図19 「飯田城外廊開鑿之図」の二の丸



挿図20 「安富邸図」の二の丸

引用・参考文献

飯田市教育委員会	1988	『丸山遺跡』
飯田市教育委員会	1998	『美女遺跡』
飯田市教育委員会	2002a	『飯田城跡』
飯田市教育委員会	2002b	『箕瀬遺跡』
飯田市教育委員会	2003	『羽場曙遺跡 方角東遺跡』
飯田市教育委員会	2004a	『飯田城下町遺跡』
飯田市教育委員会	2004b	『権現堂前遺跡』
飯田市教育委員会	2006	『飯田城下町遺跡』
飯田市教育委員会	2007	『飯田城跡』
飯田市教育委員会	2008	『羽場曙遺跡 方角東遺跡』
飯田市教育委員会	2009	『切石遺跡群』
飯田市教育委員会	2010	『箕瀬遺跡』
飯田市教育委員会	2012	『飯田・上飯田の歴史 上』
飯田市教育委員会	2015a	『飯田城跡（桜丸）』
飯田市教育委員会	2015b	『大体下遺跡』
飯田市教育委員会	2016	『飯田城下町遺跡』
飯田高校考古学研究会	1975	「飯田市大門町遺跡」『下伊那考古学会誌』Ⅱ
下伊那地質誌編纂委員会	1976	『下伊那の地質解説』
飯田市教育委員会	2015	『飯田城跡（桜丸）』
飯田市美術博物館	2005	『飯田城ガイドブック—飯田城とその城下町をさぐろう—』



本丸調査区調査前
(南東から)



本丸調査区調査前
(東から)



本丸調査区調査前
(北西から)

図版2



SB031全景（南から）



SB031全景（西から）



SB031全景（北西から）



SD001全景（東から）



SD001全景（東から）



SD001全景（西から）

図版 4



SD001石組（東から）



SD001石組（西から）



SD001土層



SD007全景（東から）



SD007全景（西から）



SK008

図版 6



SK009



SK017



SX012



本丸調査区全景
(北から)



本丸調査区全景
(東から)



本丸調査区埋め戻し



二の丸調査区調査前
(北東から)



二の丸調査区調査前
(南西から)



SD005・008





SK011・014



二の丸調査区全景
(北東から)



二の丸調査区全景
(北西から)



SK002徳利・猪口・湯飲み



SK002土瓶



SK002火鉢



日夏耿之介記念館調査区（全景）



日夏耿之介記念館調査区（部分）

報告書抄録

ふりがな	いいだじょうじょうあと							
書名	飯田城跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
編著者名	山下 誠一							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Tel 0265-22-4511 Fax 0265-22-7969							
発行年月日	2020年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東經 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いいだじょうあと 飯田城跡 (本丸)	飯田市追手 町2-655-6	20205	1080	35° 30' 45"	137° 49' 55"	20151124 ～ 20160115	65.2m ²	耐震性防火 貯水槽設置 伴う発掘調 査
いいだじょうあと 飯田城跡 (二の丸)	飯田市追手 町2-655-7	20205	1080	35° 30' 45"	137° 49' 52"	20160107 ～ 20160115	62.5m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
飯田城跡 (本丸)		中世 近世	用水路 掘立建物 溝・土坑・柱穴	近世・近代陶磁 器、瓦	飯田城本丸へ水を引く石組 水路の御用水跡を調査した。			
飯田城跡 (二の丸)	城跡	中世 近世	溝・土坑・柱穴 礎石	近世・近代陶磁 器、瓦	明確に役割を特定できた遺 構はない。			
要約	本丸調査区については石組水路の御用水跡やそれ以前の掘立建物を調査し、重要遺構検出により埋め戻して現地保存を図った。 二の丸調査区については礎石建物の石を3個と崩の雨落ち溝の可能性のある遺構を確認したが、近世以降の擾乱も多く、その他の土坑含めて性格は不明である。							

いいだじょうじょうあと
飯田城城跡

2020年3月30日発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534

飯田市教育委員会

印刷 杉本印刷株式会社
